The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ベーニー・マーダオ・ダース作『上人伝要解』（上）
Author(s)	長崎, 広子
Citation	印度民俗研究. 2015, 14, p. 21-44
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/51411
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ベーニー・マーダオ・ダース作

『上人伝要解』（上）

長崎　広子

ヒンディー文学史における『上人伝』と『上人伝要解』

神に対するひたむきな帰依をとく宗教運動バクティ信仰が北インドを席巻していた 16 世紀、トゥルシーダース Tulasīdāsa は、『ラームリャチットマーナス *Rāmacaritamānasa*』を著し、ヴィシュヌ派ラーマ信仰を民衆に広めたことで、宗教的にも高くその功績が認められた詩人である。

ヒンディー文学史上最高の詩人とも称されるトゥルシーダースについて、その生い立ちを知りたいという信者たちの強い願いがある一方で、本人は自らについてほとんど記しておらず、彼と同時代のナーバーダース Nābhādāsa が著した『信徒列伝 *Bhaktamāla*』の 6 行の詩編とそのおよそ 100 年後にその注釈としてプリヤーダース Priyādāsa により著されたトゥルシーダース伝が一般に知られてきたが、内容的には信者の欲求に十分に応えたとはいえない。

そのようななか、今回翻訳紹介するベーニー・マーダオ・ダース Beṇīmādhavadāsa 作『上人伝要解 *Mūla gosāīṃ-carita*』は 19 世紀末から存在は知られ、20 世紀に話題になったトゥルシーダース伝である。作者はトゥルシーダースの弟子で、『上人伝要解』は『上人伝』の読誦用の簡易版として描かれたという。サンスクリット叙事詩『ラーマーヤナ』の著者とされるヴァールミーキがトゥルシーダースとして降臨し誕生してから没するまでの出来事が、驚くべき詳細に記されている。しかも、『上人伝要解』の最後に記された創作年が 1630 年（S.V. 1687）で、作中に記されたトゥルシーダースの没年である 1623 年（S.V. 1680）からわずか 7 年でこれほど詳細な上人伝が書かれたことに人々は驚いた。言語はヒンディー語東部方言のアワディーが用いられ、トゥルシーダースの『ラームリャチットマーナス』と同じ caupāī 詩の最後に二行詩 dohā が配置される段落構成で全 121 dohā ある。

この作品がラーマ信者たちの熱烈な歓迎を受けた一方で、研究者からは多くの疑義が出された [1]。第一に、この作品が突如 20 世紀になって出版されはしたものの、その写本の存在が疑わしいからである。ヒ

[1] 上人伝の発見のいきさつについては、[Lutgendorf 1994]に詳しい。また拙稿「聖者トゥルシーダース伝の変容」にはナーバーダースの『信徒列伝』がプリヤーダースの注釈で大幅に増補改訂された変容の詳細を記している。

ンディー文学のアンソロジー*Śivasiṃha saroja* に触れられているように、以前からベーニー・マーダオ・ダースの著した『上人伝』が最も詳細なトゥルシーダース伝と噂されてはいたが、長年現物が見つからず、1926 年にナーガリー文字普及協会のレポートが発見したと記した『上人伝要解』の写本は、その後行方不明で、本当に発見されたかどうかも疑わしい。さらに、1923 年と 26 年に写本が発見された『上人伝』には創作年が記されておらず、作者が自らの師と語っているマハントは 18 世紀のアヨーディヤーに実在した人物であることから、『上人伝』と『上人伝要解』(1630) の著者が同一人物でない可能性もあり、研究者の頭を悩ませている。

第二に、内容の信憑性の問題がある。親に捨てられたトゥルシーダースにパールヴァティー女神が食事を与え、トゥルシーダースが女を男にし、死体を生き返らせるといったさまざまな奇跡が描かれ、それが研究者から嫌われることになったのだ。だが、プリヤーダースの『信徒列伝』の注釈でも死体を生き返らせる逸話はあり、こうした奇跡の描写は聖者伝文学の特色のひとつといえる。本作品はそれが極端に誇張されたものととらえるべきであろう。

だが第三に、作中で描かれたさまざまな出来事に年月や曜日、時刻まで記されている点がさらに作品の信憑性を低下させてしまった。『上人伝要解』に年号が明記された出来事を時系列順に示すと次のようになる。

S.V.1554		誕生
S.V.1561	(7 歳)	入門
S.V.1583	(29 歳)	結婚
S.V.1589	(35 歳)	出家と妻の死
S.V.1607	(53 歳)	ラーマ神との出会い
S.V.1616	(62 歳)	スールダースの訪問
S.V.1628	(74 歳)	『ラームギーターヴァリー *Rāmagītāvalī*』、『クリシュナギーターヴァリー*Kṛṣṇagītāvalī*』執筆
S.V.1633	(79 歳)	『ラームチャリットマーナス』完成
S.V.1640	(86 歳)	『ドーハーヴァリー *Dohāvalī*』執筆
S.V.1642	(88 歳)	『サトサイヤー *Satasaiyā*』執筆
S.V.1669	(115 歳)	友人トーダル・マル死去、『ハヌマーン・バーフク *Hanumāna bāhuka*』、『ナハチュー*Rāmalalā*

nahachū』、『ジャーンキー・マンガル *Jānakī maṅgala*』、『パールヴァティー・マンガル *Pārvatī maṅgala*』『ヴァイラーギャ・サンディーパニー *Vairāgya sandīpanī*』、『ラーマージュニャー *Rāmājña*』執筆

S.V.1670　(116 歳)　ムガル皇帝ジャハンギールとの出会い

S.V.1680　(126 歳)　死去

作品の中では、スールダースやミーラー・バーイーといった同時代の著名な人物が軒並み登場し、彼らとの幅広い交流関係が強調されている。交通手段の乏しかった時代にトゥルシーダースはバドリーナートからラーメーシュヴァラム、プリーといったインド中の名だたる聖地を旅していることも、トゥルシーダース礼賛としての聖者伝の性質を考慮すれば許容できる。だがその一方で、幽霊となったオールチャーの詩人ケーシャブダースを成仏させ、神話上の聖者であるヤージュニャヴァルキヤ聖仙やバラドヴァージャ聖仙に会う逸話などは、にわかに信じがたい。なんといっても、トゥルシーダースが 126 歳という長寿で亡くなっている点は、明らかに非現実的である。

こうして多くの疑義が出された曰くつきの聖者伝ではあるが、信仰の場では、ありえないほどの長寿や数々の奇跡がトゥルシーダースの名声をさらに高めることに貢献した。換言すれば、こうした伝記が存在するという事実がトゥルシーダースの偉大さを示しているともいえる。『上人伝要解』は、その言語にヒンディー語西部方言のカリー・ボーリーの要素が認められるということから、作品に記された創作年ではなく、研究者の間では 19 世紀後半の作品ではないかと考えられている。ということは贋作になるのかという話だが、真作か贋作かを議論することは無意味だろう。なぜなら、バクティ期の聖者文学の多くは現在に至るまでそれぞれの詩人の名で伝えられた詩があるというだけで、写本が発見されても複数の系統のものがあったり、時代を経るにしたがって増える場合もあり、その詩人の名を借りて弟子などが記したかもしれず、真作か贋作かを見極めることは不可能に近い。筆者が今回翻訳紹介する理由は、この作品の内容が極めて興味深いというその一言に尽きる。トゥルシーダースの窮地を救うために神々が自ら立ち上がり、この世とあの世の境界はあいまいで、あちこちに散りばめ

られた呪いや呪縛からの救済といった超常現象が作品を刺激的に盛り上げ、それでいてトゥルシーダース上人の悲しみ、葛藤、喜びといった内面の動きも丹念に描かれた、味わい深い作品なのである。たとえ時代的には新しい作品であったとしても、ベーニー・マーダオ・ダースなる人物あるいは彼の名を語る人物がその時代までにトゥルシーダースに関して閉ざされたコミュニティーで語られていた伝承を集めて記したとすれば、聖者伝の変容過程を探るうえで本書の意義は大きいといえよう。あるいは、ベーニー・マーダオ・ダースの創作であったとしても、創作当時トゥルシーダースがどのような聖者として考えられていたかが映し出された作品であり、そこにも一定の価値は認められる。研究者が言うように 19 世紀の作品であるとすれば、ナーバーダースの『信徒列伝』とプリヤーダースの注釈に描かれたエピソードはすべてこの作品に描かれているため、この 2 作品を参照していることは確実であり、それを踏まえたうえで創作を加えたか、風伝を集めたうえで脚色したかになる。ベーニー・マーダオ・ダースは同時代のさまざまな人物の取材も行ったうえでトゥルシーダースとの親交を描きだし、さらにシク教の教祖ナーナクが大旅行家であったことに倣い、トゥルシーダースをインド各地のヒンドゥー教の聖地巡礼に行かせ、それまであった聖者伝の魅力的な部分をもれなく盛り込むことに成功している。蛇足かもしれないが、伝播の過程でカリー・ボーリーのような新しい言語の特徴が誤って挿入されたと見られるにしても、作品の最後に記されたとおりトゥルシーダースの死後まもなく著された作品であれば、この詳細なトゥルシーダース伝の価値は計り知れない。

おそらく作品末に記された 1630 年という創作年によるところが大きいと思われるが、『上人伝要解』は『上人伝』よりもはるかに注目され、一般に知られている。そこで今回は『上人伝要解』を翻訳した。訳出部分は全体のおよそ半分、トゥルシーダースが『ラームチャリットマーナス』を執筆する場面までで、後半部分は次号につづく。彼の名を知らしめた『ラームチャリットマーナス』の執筆に際しては、興味深い逸話が綴られている。トゥルシーダースが毎日書き留めた詩節は夜のうちにすべて消えてしまい、いつまでたっても完成しないが、シヴァ神が夢枕に立ち、サンスクリットで書くのではなく、民衆の言葉バーカーを用いるように指示している。トゥルシーダースは自らの役割を認識し、本格的に『ラームチャリットマーナス』の執筆に取り掛かるまでが描かれている。のちにトゥルシーダースはバーカーでラ

ーマ物語を描いたためにバラモンの反感を買うのだが、それを勧めたのがシヴァ神であったというのである。なお、本作品には頻繁にシヴァ神が登場し物語を展開させるうえで重要な役割を担っているが、これは『ラームチャリットマーナス』の中でシヴァ神がパールヴァティー神妃にラーマの偉業を語って聞かせ、時には話を展開するうえで新たな登場人物を送り込んだりすることと重なる。おそらく『ラームチャリットマーナス』の物語構成に倣ったのであろう。

訳出にあたっては、ゴーラクプルのギータープレス社に保管されていた、同出版社がかつて出版したテキストをコピーさせてもらい使用した[2]。同社にも一冊しか残されていない貴重な本を快くコピーしてくださった同社のご厚意にこの場を借りてお礼申し上げる。本作品の注釈や現代語訳は出版されておらず、現代ヒンディーとは異なり名詞の格が明記されない韻文であるため複数の解釈が可能なこと、アワディー地方の語彙と思われる単語の意味が特定できないことから、翻訳は困難な作業であった。訳出や解釈の不明な部分についてご教示ご助言くださったDevendra K. Singh博士とUdayshankar Dubey博士には心より感謝申し上げる。

＊原語のカタカナ表記は、神名のみサンスクリットの読みで、それ以外は現代ヒンディー語の発音に倣った。ローマ字への音写は 20 世紀以降の人物や書籍については語末の潜在母音の a は表記していないが、バクティ文学や詩人については潜在母音をすべて表記している。

使用テキスト

Beṇīmadhavadāsa, n. d., *Mūla Gosāī-Carita*, Gorakhpur: Gita Press.

---

[2] 現時点で筆者が確認している『上人伝要解』のテキストは、上述のギータープレス社以外に、Sītārām Caturvedī etc. ed., *Tulasī-granthāvalī*, 3rd. vol., Kāśī: Akhil Bhāratīya Vikrama Pariṣad, 1973, 81-100 と *Nāgarī Pracāriṇī Patrikā*, Bhāg 7 Aṅk 4, S.V. 1983(1926)がある。また、ギータープレス社からは 1934 年と 1937 年と雑誌 *Kalyāṇ* の *Mānasāṅk* 特別号の 1938 年に同テキストが出版されたということであるが[Lutgendorf 1994: 69]、筆者がギータープレス社を訪問した際には一冊しか保管されていなかった。今回使用したテキストは 1934 年か 1937 年のどちらかの版になるはずであるが、冊子には出版年が記されておらず、特定できない。

参考文献
Caturvedī, Sītārām, et al. ed., 1973, *Tulasī-granthāvalī*, 3rd. vol., Kāśī: Akhil Bhāratīya Vikram Pariṣad.
Lutgendorf, Philip, 1994, “The quest for the legendary Tulsīdās” In: W. M. Callewaert and R. Snell (ed.), *According to Tradition: Hagiographical Writing in India*, Wiesbaden: Harrasowitz Verlag.
McGregor, Ronald Stuart, 1984, *Hindi literature form its beginnings to the nineteenth century*, A history of Indian literature, Vol. VIII, Fasc. 6., Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
Pāṇḍe, Ratnākar, ed., 1983, *Dr. Śyāmasundaradās ke aprakāśit nibandh*, Vārāṇasī: Hindī Pracārak Saṃsthān.
Śyāmasundaradās & Pītāmbaradatt Badthvāl, 1931, *Gosvāmī Tulasīdāsa*, Allahabad: Hindustani Academy.
Tripāṭhī, Rāmanareś, 1935, *Rāmacaritamānasa: Bhāṣā-ṭīkā*, Prayāg: Hindī Mandir.

****

上人伝要解
（トゥルシーダース上人伝）

サントたちは説得して言った。「上人伝をもう一度語ってください [3]。できるだけ簡潔であれば有りがたい [S1]」

私はこれを聞き、毎日の読誦のために語ることとします。[しかし] シェーシャが語ることのできない高貴な上人伝。とても知識のない愚鈍な私がトゥルシーのすばらしい名声を語れましょうか [S2]。

聖仙にして最初の詩人であり知の宝庫（=ヴァールミーキ）。あたか

[3] ベーニー・マーダオ・ダースはこれ以前に大部の『上人伝』を著しており、それよりも簡単な物語を人々が所望したことを、この作品執筆の動機としている。

もブラフマー自身が降臨されたかのようである。シヴァ神に言われたように、十万のラーマ物語を語り、三界に広めた[4]。三方法で[ヴィシュヌの]十の権化、ヴェーダ、十のアーガマ、天啓聖典、そして三人の妃[5]に敬礼いたします。天啓聖典よって聖音としての最高の真理は、聖なるラーマ。自らの各部分をつなぎ合わせて人の姿を取られた。こうして最高の聖仙（＝ヴァールミーキ）が考えたように、ハリ（＝ヴィシュヌ神）は神聖な行いをなされた。ハヌマーンは聖音オーム（＝ラーマ）という愛しい魂におわし、最高の真理に耽り、その方（＝ラーマ）の脳裏に住まう。このように最高の愛を得て、[ハヌマーンは]神聖なラーマの徳を語った。聖仙の王（＝ヴァールミーキ）は猿王（＝ハヌマーン）によるこの驚くべき作品を見て、これを気に入った。

「この秘められた奥義は公にせず、広めないことをお願い申し上げる」

その時アンジャニーの息子（＝ハヌマーン）は[自らの作品を]破壊し、聖仙は微笑んで押し頂いた。善き風神の息子（＝ハヌマーン）は聖仙が慎み深いことを見て、その後大いに聖仙を賞賛し、恐怖のなくなる恩恵を与えた [D1]。「末世に生を受けた時、末世[の苦しみ]から常に[人々を]解放するだろう」その呪いのために、最初の詩人（＝ヴァールミーキ）は大いなる闇を除去する太陽となった。[母]フルシーの胸から湧き上がり[6]、神のような信者はハスのように花開いた。

サラユー河岸の善き地のバラモン。家系（ゴートラ）は尊いパラーシャラで強い基盤があった。吉兆の地にパタウジー・バラモンの祖先が暮らしていた。そのため家名はジュラケー[7]となった。サラユー河岸のドゥベー達

---

[4] ナーバーダース著『信徒列伝』に著された「堕落した末世に生類を救うために、ヴァールミーキはトゥルシー[ダース]として生まれ変わった」を踏まえた描写と考えられる。

[5] ラーマの父ダシャラタ王の三人の妻カウサリヤー、カイケーイー、スミトラー。

[6] udaye hulasī udagahāṭihi te (喜びが沸き起こり開いた). udaghāṭihi に対して *Nāgarī Pracāriṇī Patrikā* では ura ghāṭihi になっている。本翻訳では、こちらを採用し、hulasī を後に登場するトゥルシーダースの母の名から hulasī ura をフルシーの胸と解釈した。

[7] ジュラケーという名の意味と由来は不明。なお、トゥルシーダースのジャーティについては議論があり、サラユーパリー・ブラフマンや

の村に、すべてのジャーティの者たちが住んでいた。行いがよく、よい人物で、聡明で供儀を行う人、ラージャープルの重要なラージグル（王の司祭）であった[8]。その家に十二か月間とどまり、蟹座に木星と月が重なり第七室に火星、第八室に太陽の子（＝土星）が入り、神聖で美しい暁のアビジト刻に、ヴィクラマ暦一五五四年ヤムナー河岸でシュラーヴァン月の白半第七日トゥルシーは生まれた [D2]。

息子の誕生の祝いの音楽が鳴り始め、飾られ、喜びにあふれた。一人の下女がその時出てきて言った。

「ご主人さま、家にお呼びです。赤ん坊は生まれてから全く泣きません。その子はこの世に生まれたとたん『ラーマ』と言いました。歯が三十二本生えているのが今見られました。歯の隙間がなく、すべて生えそろっています。このような子は五歳児のように見えます。赤ん坊はそのような運命に生まれついたのです。私ももう年を取りましたが、今までの人生で、ご主人さま、このような赤ん坊をどこにも見たことがありません。へその緒を切る時に、女たちは法螺貝の音を聞いて言っておりました。人は震え、噂しております。悪魔が生まれたとつぶやいております。ご主人さま、急いで家の中にお入りください。[皆を]説得し、出産の苦しみを取り除いてくださいませ」

下女の言葉を聴いて、父[9]は急いで立ち上がった。出産の部屋の戸口に立つと、目に涙があふれた [D3]。涙をためた目で赤ん坊を見ると、胸が苦しくなった。心の中で前世の罪の報いと考えて外に出た。

仲間、友、親しい者、著名な占星術師、といった重要な人物が集まり、思案しはじめた。生まれたばかりの赤ん坊についてどうしたものかと彼らは言った。パンチャーヤト[10]はこう結論を下した。三日後まで赤ん坊が生きていたならば、世俗のことや占いのことを考えよう

カニャークブジャ・ブラフマンと言われるが、キショーリーラール・グプタはサラユーパリー・カニャークブジャ・ブラフマンという折衷案を提唱している。[K.Gupta 1973:158]

[8] トゥルシーダースの父は、ティーカンプル王のグル（師）とも言われていることから、ラージグル（王の司祭）という単語が父に対して本テキストではしばしば用いられている。実名は本作品では記されていない。

[9] Bhṛgubaṃsamani ブリグの家系の宝石。

[10] 部族の取り決めを行うお偉方５人衆。

[D4]。

十日がすぎ十一日になり、真夜中の時刻が過ぎた時、母フルシーは親しい下女に語り始めた。「お前、私の魂という鳥が飛んでいきたがっている（＝まもなく死ぬだろう）。今すぐ赤ちゃんを連れて、ハリプル[11]に行きなさい。お前の舅や姑が住んでいるところに行って、私の赤ちゃんをしっかり大切に育てておくれ。友よ、神がお前にご加護を与えてくださるだろう。そうでなければ、私が死ねば、確実に悪い奴らが赤ん坊を捨てるだろうと思っておくれ。友よ、誰にも知られないように夜のうちにお行きなさい」

赤ん坊に祝福を与え、その女に抱かせた。自分の装身具を与え、送り出した。女は赤ん坊を連れて黙って出発した。フルシーの心に息子との別れの悲しみが広がった。ヴィシュヌ神、シヴァ神、ブラフマー神に呼びかけ、「私の宝をお守りください」と祈った。

十一日の神の刻[12]、フルシーは死んだ。早朝にヤムナー河岸に葬式のために運ばれた [D5]。

昼すぎに[下女]チュニアーは自分の姑の足にすがり、すべての事の顛末を語って聞かせた。姑は聞いて、「とてもよいことをした」と言った。「家では若い牝牛の乳を飲ませなさい。母がいなくても赤ん坊を生かしなさい」そこで愛情をかけて育てはじめた。赤ん坊が喜ぶことをしてやった。このようにして六十五か月がたった。赤ん坊は話し、歩き回れるようになった。

畑に行った時にヘビに噛まれ、チュニアーはあの世へと旅立った。その時、[父である]司祭に知らせを届けた。それを聞いて、[父は]悲しみを覚えて言った。「そのような息子を連れ帰り、私はどうしたらよいのか。その子を育てる者を破滅させるというのに。私の息子は生まれながらにこの世で不幸なのだ。その子が死のうが生きようが、私には関係ない」

ベーニー・マーダオ・ダースは語る。前世の業の厳しい報いを受けずにはいられない。これは必然の節理である [D6]*。避けようのない必然の節理は真実として宇宙に広がる。最上の詩人でさえこのありさま*

---

[11] ラージャープルの隣の町。

[12] 夜明けのおよそ 1 時間前の吉兆の時刻。

というのに、愚かな詩人では言うに及ばず。

自らの支障となると考え誰も憐れみをかけず、目をそむけた。少年は門口を歩き回り、彼らを見ては心で泣いた。少年の様子を見て、この世の母パールヴァティー女神はバラモン女に身をやつし、少年に毎日食事をさせた [S3]。

こうして二年が過ぎた。町の人々はこの奇妙な様子を見ていたが、探るために来て調べた者は、バラモン女の身元を知ることはできなかった。そこに密偵の女が来て、その女神を見つけた。母神が子供に食事をさせて帰ろうとした時、足元にひれ伏し、必死になって行かせまいとした。その時から母神は姿を消してしまった。シヴァ神は妻（＝パールヴァティー）の願行の理由を心で察し、人の世にふさわしい簡単な方法をとることにした。

[シヴァ神の]お気に入りの弟子アナンターナンドがいた。[さらにその弟子に]有名なナルハリヤーナンドがいた。ラームスサイルという庵を結んで住み、愛しいハリ[の親愛]に没頭していた [13]。

彼らの前にシヴァ神は自ら姿を現し、命じて喜ばせた。愛しいラーマの行いの湖を語って聞かせ、バラモンの息子のいるところに向かわせた。「少年を連れてアワド [14]に行きなさい。正式にマントラを授けなさい。私の語ったラグ族の主ラーマの話をその子に教えなさい [D7]。心の意識が覚醒した時、[その少年は]物語を作って語るだろう。少年を育てなさい。のちに支えとなろう [D8]」

深遠なシヴァ神の言葉を聞いて、ナルハリ聖者はとても喜んだ。ラグ族の王ラーマを念想し、すぐにハリプルに向かった [S4]。

町で少年を探して養子にし、寄る辺のないバラモンの息子に庇護を与えて言った。「ラームボーラー [15]よ、心配するな。すべて[苦しみを]

---

[13] アナンターナンドとナルハリヤーナンドの二人の聖者はラーマーナンド派とされる。ナルハリヤーナンドがラーマーナンドの 7 代目の弟子になるという説もあるが、詳細は不明である。だが、ラーマーナンド派のナーバーダースが著した『信徒列伝』にもトゥルシーダースは紹介されていることから、トゥルシーダースはラーマーナンド派の信者とされることがある。本書もこの流れをくんでいる。

[14] ラーマの故郷である聖地アヨーディヤー。

[15] Rāmabolā. トゥルシーダースが生まれた時にラーマと言ったことから「ラーマを語る者（ラームボーラー）」が幼名であったとされてい

取り除き、お前を養育しよう」
　少年は思った。私のために信者の姿をまとわれたこの慈悲深き方はハリだと。
　町の人々の許可を得て、子供とともに信者ナルハリは旅立った。
　アワドの町に到達した時に、町じゅうの路地を歩き回った。ヴィクラマ暦一五六一年マーグ月白半第五日金曜日の日出の刻、サラユー河岸でバラモンたちと供儀を行い、バラモンの息子を入門させた。教えなくても、少年は自らバラモンが与えたマントラとサーヴィトリー・マントラを唱えた。学者たちは驚き、その少年は立派な学者のようだと言った。ナルハリ・スヴァーミーは第五番目の通過儀礼（＝入門式）をしてやった。八十四回繰り返す輪廻から解放をもたらすラーマ・マントラを授けた [D9]。

　ハヌマーンの丘がある場所に師（＝ナルハリヤーナンド）は十か月滞在した。自分の弟子に学問を教え続け、そしてパーニニのスートラを暗記させた。幼い少年に暗記の力がつき、熱心さと信愛を示し始めた。[この子は]徳が高いと心で考えて喜び、[少年が師の] 足をもんでいる時に、多くの祝福を与えた。「生まれてから今までの自らの哀れな状況をこの師に語りなさい」
　少年の話を聞いて驚き、心に慈悲と痛みが生じた。師は深刻になり、目に涙をためた。師と弟子の様子を語れる詩人がいようか。[師は弟子を]慰めて抱きしめ、これからの人生に祝福を与え、落ち着かせた。
　ハリの好む季節である冬になった時、[師は]弟子を連れて出発した。さまざまな歴史や講話を語り、スーカラクシェートルに着いた。サントたちに喜びを与えるサラユー川とガーグラー川の合流点 [D10]。そこでふたたび五年間滞在し、苦行や読誦に没頭した。弟子は学習して知性が芽生え、熱心に学ぶうちに知識を持つ賢者となった。[ナルハリは]シヴァ神の教えを思いだし、最高の知識を聞かせる準備をした。その時ラーマ神の行いの湖を語った。聞いて少年は真理を獲得した。何度も何度も師は彼に聞かせ、とても奥深い物語を教えた。最高の師はこのように知識を授けて、ヴァス祭（クンブ祭？）が開催されると弟子とともに行った。
　途中で何度も休んだ。世間では水や食物が話題になっていた。ある

る。

時は善き行いを教え、ある時は不幸な者の不幸と悲しみを取り除いた。歩き回り、心に喜びを抱き、聖地カーシーにやってきた。最高の師（＝ラーマーナンド）の善き場所に行って滞在した [D11]。魅力的な清らかなパンチ・ガンガー・ガートでガンジス川が戯れる波を見た [16]。

それから苦行者（＝ナルハリ）が長い間暮らしたその場所に、ヨーガの達人、善き探究者、完成した人が集まった。そこにシェーシャ・サナータナがいて、肉体は老いても心は若かった。ヴェーダとアーガマの詳しい知識を持ち、導師はヨーガの完成者で苦行を積み、あらゆることを知っていた。彼は少年に満足した時、師に美しい言葉を語った。

「聖者よ、あなたの弟子を私にお譲りください。この子の心はこの世のものではなく、神のことを考え続けています。この子に四ヴェーダを教えましょう。そして神聖な六アーガマと六ダルシャナを。歴史、プラーナ、詩作を。経験された得難い象徴の結果を。偉大な学者にいたしましょう。聞き入れてくだされば、あなたに大いなる喜びを与えましょう」

導師の願いを聞いて、ムニは真剣に考え喜んだ。少年を呼んで、ガンジスの川岸で託した [D12]。数日後に優れた苦行者（＝サナータナ・スヴァーミー）のもとに住み、少年は学問をはじめた。すべての様子を確認して、師[ナルハリ]はチットラクートに向かって去っていった [D13]。

少年はそこに十五年間住んで、あらゆる学問を喜んで獲得した。全身全霊で師の世話をし、亡くなると心をこめて葬式をした。

深い悲しみを覚えて故郷に向かった。ラージャープル近くに着くと、自分の家が壊れているのを見た。若者も大人も生き残っていなかった。一人の詩人が、どうしてバラモン一家が滅びたのか、村の物語を語った。

次のように言った。「司祭（＝トゥルシーダースの父）が[息子を]捨てる話しをしていた時に、そこに激しい苦行をしていた苦行者がいまして、[その話に怒って]サボテンを取って呪いをかけました [17]。六

---

[16] パンチ・ガンガー・ガートはラーマーナンド派のガートと知られ、ナルハリヤーナンドがラーマーナンド派であったため、ここに滞在したのだろう。

[17] 棘のあるサボテンには魔力があると信じられている。

か月のうちに司祭、十年のうちに一族は滅びたのです」

それを聞いてトゥルシー[18]の心に悲しみが広がった。作法にのっとり供物を備えて祖先への供儀を行った。町の人々が懇願し、[彼のために]家を建てさせた。上人はそこに暮らしはじめ、美しいラーマ物語を語った [D14]。

ヤムナー川の対岸のターリパター村に、バラドヴァージャ・ゴートラのバラモンが暮らしていた。カールティク月第二日の沐浴になった時、高貴な家族は一族総出でやってきた。トゥルシー[19]が物語を読んでいるところで[彼らは]沐浴と喜捨を行った。バラモンは[トゥルシーの]輝きを見て喜んだ。多くの人々に[彼について]聞いて自分の家に帰り、またヴァイシャーク月にやってきた。手を合わせて美しい話を語った。「偉大なる夜が近づいた時、夢でドゥルガー女神が[娘の結婚を]促しました。神聖なあなたの名を語って、すべての場所を教えてくださいました。調べてここに参りました。私の願いを聞き入れてください。これからどこに行けばよいのでしょうか？」

懇願を聞いて、考え始めた。そして躊躇しながら[上人は]言った。

「結婚したくはありません。他のところに行ってください [D15]」

バラモンは固く決心しており、聞き入れなかった。意を決して飲まず食べなかった。次の日[トゥルシーが]受け入れると、固い決意をしていたバラモンは食事をとった。

家に帰って思案し吉日を決めた。家族僧を送って賞賛した。これにより町の人々が加わり、すべての飾り、荷物、花婿行列を整えた。ヴィクラマ暦一五八三年吉兆のジェート月白半第十三日木曜日の真夜中に聖火を回った。花婿花嫁の入室の時、娘を見て式場の中で歓喜が湧き上がった。[人々は]パンディットである花婿に微笑んだ。三日目の式場での儀式になった。厳かな気持ちで、持参財を渡した。

別れの儀式をして偉大なる学者と花嫁は出発し、自分の町に帰り、作法にのっとって行事を行った [D16]。町の女たちが連れだって師（＝トゥルシー）の家に行き、花嫁の顔を見て喜んだ。フルシーの息子は妻の美しさを見た。月のような顔からサリーの端をずらした。心と魂

---

[18] 本テキストではこれ以降トゥルシーが使われるようになる。学習期を終えて一人前になったとして呼び名が変化したと推察できる。

[19] テキストのこの部分ではトゥルシーダースに対して hulasī suta（フルシーの息子）という単語が用いられている。

を愛しい妻に捧げた。まるでヴィシュヴァーミトラ仙が天女メーナカーを見たように[20]。昼も夜もいつも愛に耽った。幸せをつかみ、さらに欲した。互いに愛情をかけ、五年間が一瞬のように愛に耽って過ぎてしまった。

[妻を]どこにも行かせず、[トゥルシー]自身もどこにも行かなかった。一瞬でも妻がいないと落ち着かなかった。妻は母の顔を見たくなり、住んでいた父の村を見たくなり、さみしかった。兄といっしょにこっそりとその貞節な妻は出かけた。夫はバラシャーサナ[21]村にいた。夕刻に自分の家に戻ると、家が閑散としているのを見て心配した。

妻が兄といっしょに実家に帰ったことを下女が告げると、それを聞くや立ち上がり妻の実家に向かった。とても激しい愛情を感じた。何とかして川を渡り到着した。皆は扉を閉めて眠っていた。戸締りをして眠っている人々の睡眠を妨げて呼び始めた。

声を聴いて玄関の扉を開けると、びっくりして妻はうろたえた。妻は清らかな声で説教交じりに笑って言った。

「盲目の愛に支配されてきたのですか？まるで夜の闇さえ気づかないように。私の肉体は骨と皮。それに注ぐ愛情の半分でもラーマ神に向ければ、必ずや現世の恐怖から解放されますのに [D17]」

[妻の]言葉は矢のように刺さり、[トゥルシーは]一瞬も立ち止まらず、すぐに引き返した。自らの善行について考えた時に、師匠の語った言葉が思い出された [S5]。

ナルハリは語る。黄金と女性からできるかぎり遠ざかるべし。自らの安寧を望むなら、ラーマをひたすら拝むべし [D18]。

妻の兄が起きて、説得するために走って向かった。後を追ううちに朝になった。[トゥルシーは]振り返らず、兄は家に引き返してくると、妹が気絶しているのを見た。気絶していた貞節な女は起き上がり言った。「愛しい人を諭すために来ました。私の愛しい人は森に旅立ちました。命を差し出しこの身を捨てましょう」こう言って自分の身を捨て、

---

[20] 苦行中のヴィシュヴァーミトラ仙がインドラ神の命により現れた天女メーナカーに心奪われた神話。

[21] baraṣāsana. 一年分の食事 (baraṣa+asana) の意味があるが、ここでは通らないため、村の名と解釈した。baraṣa 雨季や雨との関連も考えられるが、その場合 asana の意味は不明。

貞節なバラモン女は天国へと旅立った。ヴィクラマ暦一五八九年アーシャール月黒半第十日水曜日の吉兆の刻に、教えを説いた貞節な妻はその身を捨てた。

早朝になり、最高の目的を知り、真理を学んだ立派な隠者が言った。「バラモンの家でサラスヴァティー女神が人の姿を取っておられたのだ。カーマにとっての妻ラティ、ハリにとっての神妃ラクシュミー、音階ラーガにとっての情緒ラサのように」

誰かが言った。「妻の口を使って神が話されたのだ。美徳の蔵である信者（＝トゥルシーダース）の妄迷を取り除かれたのだ [D19]」

フルシーの息子は聖地の王（プラヤーグ）に到着した。そしてトリヴェーニー[22]で沐浴し心が満たされた。世俗の衣をそこで捨て、隠者の装束をまとい、ファーファーマウ[23]に向かった。砦、ゴーマティー川、タマサー川を越え、脇目も振らずラーマの町[24]に着いた。そこで四か月間暮らした。愛しいサント、たくさんの行者、風流人とともに。

急いで偉大な聖地プリーに向かった。道中二十五か所で休んだ。その中で二か所が主要であると認められ、恩恵と呪いの話が知られている。ドゥバウリー村に四時間[25]滞在した。トゥルシーは少年ハリラームに呪いをかけた。彼を介して[トゥルシーが後に]ハリに会うことで、彼は有名な化物になった[26]。また信者の世話をしたチャールクアンリという娘に恩恵を与えた。

幸福の聖地ジャガンナート・プリーでしばらく暮らし、時間をみつけてはヴァールミーキ・ラーマーヤナを自らの手で写した [D20]。

---

[22] 聖地プラヤーグのガンジス川とヤムナー川の合流点。

[23] phaphahāṃ プラヤーグ（現アラーハーバード）内の地名。

[24] raghuvīrapurī ラーマの町＝アヨーディヤー。

[25] ghari cāri. ghari の時間の長さは 24 分に相当するとの説もあるが、その場合トゥルシーダースは 1 時間弱ドゥバウリー村に滞在し、短い時間に少年に呪いをかけたことになる。なお呪いの理由はここには書かれていないが、瞑想中のトゥルシーダースに土の塊を投げたという話が語られることもあるらしい[Śyāmasundaradāsa 1931: 56]。

[26] 本作品でも後に描かれるように、トゥルシーダースが森でこの化物に会い、ラーマに会いたいという願いを伝えると、まずハヌマーンに会うようにすすめられ、チットラクートでラーマに会った逸話。

ラーメーシュヴァルに向けて出発した。そこから世間で有名なドゥヴァーラーヴァティに行った。またそこから意気揚々とバドリーナートの聖地に到着した。ヴャーサ仙と主ヴィシュヌ神は[トゥルシーを]気に入り、姿を現し、『ラームチャリットマーナス』の徳を称えた。そこから到達しがたい道をすすみ、マーンサローヴァル湖まで行った。心の欲を捨てた者は、そこに行き目的を果たすことができる。そこで高貴な信者と講話を行う者は、世俗の迷いから解放されるだろう。神の助けを得て上人[27]はそこまで行きルーパー湖を見て、ニルギリ山を拝んだ。最高の紳士ブシュンディ聖仙が[トゥルシーだと]気づいた。また湖に戻ってきてカイラーサ山を右繞した。

こうして有意義な聖地巡礼をし、バヴァバンの森[28]に行って暮らし始めた [D21]。[聖地巡礼に]十四年十か月十七日がかかった。そこに四か月間滞在した。毎日ラーマ物語を語って心に喜びをもたらした。森に住む立派な信者は毎日それを聞いていた。聞いて心からそれに満足していた。

森に一本の木があった。その上に化物が住んでいた。[トゥルシーは]その根元に小便のための水を捨てていた。それを飲んで化物は渇きを癒していた。それが幼少期に自分に呪いをかけた聖者だと知った時、ある日[化物は]姿を現して言った。「望んでおられることを言ってください。いたしますので」

フルシーの息子は言った。「ラグ族の王子に会いたいと私は思っている」

化物はそれを聞いて言った。「[あなたの]講話を聴きに毎日ハヌマーンがやって来る。最初にやって来て誰よりもあとに帰る。汚い衣をまとい、体は癩者だと思ってください。頃合いを見計らって、堅い意志を持ち、御足を掴んでください [S6]」

強い意志を持ちハヌマーン神を見分け、上人[29]はとても慎み深く話しかけ、足を掴んで離さなかった。風神の息子は言った。「望みを言いなさい」

「私をラグ族の英雄に会わせてください」がくがくした声で言った。

「お前はチットラクートに行って奉仕しなさい。そこで会うことが

---

[27] ここではトゥルシーダースは munirāī（聖者の王）と記されている。
[28] チットラクート近くの森の名。
[29] munivara 聖者の中で最上の者。

できるだろう」

汚れのない行いに関するハヌマーンとの詳細な次の出来事は、全世界で知られている [D22]。

意識を集中してチットラクートに向かって出発した。心に期待感が生まれた。だが自身の下らない行いを考え、足が進まず、じっと立っていられなくなった。ラーマの行いについて思い出すと、すたすたと道を走り出した。こうして上人はそこに到着し、ラーマ・ガートに滞在した。ある時、右繞をするために出かけ、そこで特別な姿が現われたのを見た。二人の王子が美しい馬に乗り、森の鹿と戯れて行ってしまった。その美しさを見て心が魅了されたが、このような姿をした者が誰だかは分からなかった。ハヌマーンがすべての秘密を語った。[上人はラーマに]会いたくて後悔し続けた。その時ハヌマーンはもう一度早朝会えるだろうと慰めた。

心地よいヴィクラマ暦一六〇七年マーグ月黒分第十五日水曜日。ガートに行って座り、早朝そわそわしていた [D23]。善きラーマ神が姿を現し、「修行者よ、白檀を付けてください」と言った。ハヌマーンは鸚鵡の姿を取り、注意を促す二行詩を読んだ [S7]。

チットラクートのガートでサント達の群れ。トゥルシーダースは白檀を擦り、ラグ族の英雄にティラクを付ける [D24]。

ラーマの美しさに見惚れ、自らのすべての感覚を失った。目から愛の涙が流れ落ち、どうして白檀を擦れようか。主はもう一度言ったが、[上人は]気づかず、主は自らの手で白檀を取り、美しい額にティラクを付け、美しい姿を消した。[上人は]別れの悲しみに苦しみ、呆然としたままだった。夜にハヌマーンが気づかせ、元の状態に戻してくれた [D25]。

手に鸚鵡の鳥かごを持つ男女に、鸚鵡[であるハヌマーン]は読誦を教えた。フルシーの息子の信愛は大いなる栄光。すぐさま大地に広まった。

ある日カーマド山を右繞し、サウミトラ山に到着した。そこで白蛇が道に転がっていた。この世において白い身体は魅力的なものである。そちらを見て上人は言った。「月のように美しい蛇がいる」

ニガマとアーガマ、サラスヴァティー、シェーシャはハリの不思議な創造は語りつくせないと言う。上人に見られるや罪が消え、賢い蛇

は願いを言った。「私に触れて今すぐお救いください、主よ」触れるやいなや、蛇であった姿は消えた。ヨーガシュリー・ムニがそこに現れた[30]。自分の以前の物語を語って住んだ。

上人のこの奇跡を聞いて、徳の高い立派なサント達は会いに来はじめた。聖者の住居は人であふれかえった [D26]。

群衆を見て洞窟に入り、[住居の] 中も外も障りがあると考えて[上人は]隠れてしまった。ヨーガ行者や苦行者、世捨て人は上人のところに来て、会えずに帰るとがっかりした。ダリヤーナンド・スヴァーミーがやって来た。自分の座所を定め、じっとしていた。小便のために上人が出てくると、手を合わせてそのスヴァーミーは立って言った。「主よ、あなたはひどいことをなさいます。これから私が語る無礼な言葉をお許しください。小便をしたくなれば外に出て、サードゥーが来たと聞くと隠れてしまわれる。それで善き人々は悲しんでいます。お願いです、これを聞いてください。これから台を作らせましょう。その上にあなたがお座りになるのがよろしい。心清らかなサントたちがやって来た時、拝むことができれば、誰もが満足するでしょう」

台を作るというダリヤーナンドの願いを認め、作らせた。修行者、成就者、善き人たちは一日中座って喜びを得た [D27]。毎日新しい講話で情熱が湧き、清らかなサントの心は愛で満たされた。毎日遊戯が見られた。鹿の戯れる様子が見られた。

ブリンダーヴァンからヒト・ハリヴァンシャ[31]の、プリヤーダースとナヴァルダースというおつきの弟子が派遣されてきた。丁重な挨拶をした。師の贈り物の本を愛をこめて渡した。“*Jamunāṣṭaka*”と“*Rādhāsudhānidhi*”と“*Rādhikātantra*”を丁重に渡した。そしてヒト・ハリヴァンシャがその手で書いたヴィクラマ暦一六〇九年バードン月黒半第八日[32]付けの手紙を渡した。その中には熱心な願いとともに[次のように]書かれていた。[弟子が]その言葉を語った。「マハラーサ[33]の

---

[30] chīta hue. chīta には「接触、関係を持つこと」の意味があり、「その場と関係を持った」ということから「現れた」と解釈した。

[31] ラーダー・ヴァッラッバ派の開祖。

[32] ヒンドゥーの暦におけるクリシュナの生誕日。

[33] ラースリーラー。ラースリーラーはクリシュナ神の遊戯といわれる華麗な神話で、それを題材とした 8－9 月ごろのクリシュナ神の生誕祭で演じられるさまざまなパフォーマンスを含む。現在ではブラジ地方のラースリーラーとして歌舞劇がよく知られる。

夜になろうとしています。私は愛をこめて願っています。ラースリーラーの時にこの身を捨てたい。東屋を手に入れますので、私を祝福してください」

願いを聞いて上人は、「そうあれかし」と言った。毎日ニクンジュの東屋[34]に入り、神の庇護を受け、[ヒト・ハリヴァンシャは]その身を捨てた [S8]。

サンディーラーからスヴァーミー・ナンドラールが来て住みはじめた。バクトたちの盾である *Rāmarakṣā* の注釈を読んだ [D28]。講話を行い六か月が過ぎた。帰り際に何か記念のものを欲しがったので、[上人は] 自らの手で書いたお守りと毛布とともに、菊石のすばらしい神像を与えた。

このようにベーニー・マーダオ、ベーニー・ヤーダオの二人[35]、チトスク、カルネーシャ[36]、サダーナンド、ムラーリー・デーヴァ、裸の苦行者、ヴィラヒー、バグヴァント[37]、女神信者、ビバヴァーナンド、デーヴァ、太陽崇拝信者がトゥルシーに会いに来た。また南の国のスヴァーミー・ピライがやって来た。講話に耽り、皆喜びに浸った。慢心は消え失せ、言った。「上人が生まれてくださり、ありがたい。お会いできて願いはかなった」目から涙があふれ、話すことができなかった。皆は愛に浸り喜びにあふれて暮らした。一年間のサードゥーの集会がどのようにして終わったのか、まったく分からなかった。

ヴィクラマ暦一六一六年。カーマド山のそばに住んでいた時に、神聖で人気のない場所にスールダースがやってきた [D29]。クリシュナの色に浸ったゴークルナート[38]が派遣した。見た途端、上人は彼の心

---

[34] 現在もハリヴァンシャの信者たちが管理するニクンジャの東屋。伝承では毎夜ラーダーとクリシュナが戯れる場所という。

[35] McGregor によれば、Benī という名の三人の詩人がいたという。そのうちの二人か？[McGregor 1984: 186]

[36] アクバルの宮廷詩人か？[McGregor 1984: 120]

[37] Bhagavanta. バグヴァントという人名に解釈したが、バグヴァント神の信者一般を指す可能性もある。

[38] ヴァッラバ・アーチャールヤの孫。スールダースがこの派に入信していたことはゴークルナートが編纂させた宗派の信徒伝『84 人の信徒列伝』に記されている。だが、この頃ゴークルナートはまだ幼かったため、スールダースを派遣したのはヴィッタルナートの誤りともいわ

が聡明なことを理解した [D30]。詩人スールはクリシュナの神聖な愛の物語『スールサーガル』を見せた。それから一対の讃歌を聞かせ、[上人の]ハスの御足に頭を付けて言った。「[私の詩に]クリシュナ神が住んでくださるような祝福をお与えください。私のこの名声が四方に広まりますような」

優しい言葉を聞くと褒め称え、讃歌の本を持ち上げ、胸に抱いて言った。「クリシュナはいつも[この本の]真髄を味わっておられる。信者の利益をハリは守ってくださる。必ずやサラスヴァティー女神やシェーシャは[本の]偉大さを語るだろう」

講話に耽って七日が過ぎた。[スールダースは]去る時に[上人の]ハスの御足に触れ、腕をつかみ、上人は知を授け、そしてゴークルナートへの手紙を渡した。クリシュナの美しさへの思いを胸に抱き、詩人スールは手紙を受け取って去っていった。

メーワールからスクパールという名のバラモンがやって来た。ミーラー・バーイーの愛の新芽のような手紙を携えてきた [D31]。その手紙を読み、ギートとカビット韻律の詩を作り [39]、返事を書いた。「すべてを捨てハリを称えるがよろしい」と言って、バラモンを見送った [D32]。

夜明けに一人の少年が来るようになった。清らかな美しい声で歌い始めた。その歌に上人は喜んだ。その時新しく四篇の讃歌を書きとめた。次の日[少年はその讃歌を]そらんじて聞かせた。その少年は新しい歌をもらえないと動こうとしなかった。このために[上人は]讃歌を作り始めた。心に美しい感動が湧き上がった。ヴィクラマ暦一六二八年にすべての讃歌をまとめて美しい本にした。それに『ラームギーターヴァリー』の名を付けた。また『クリシュナギーターヴァリー』を創作して完成させた。二冊の本を熱心に校正して書きあげ、ハヌマーンに聞かせた。すると風神の子ハヌマーンは満足して言った。「アワドの町に行って暮らしなさい」

れている[Śyāmasundaradās 1931: 103n]。

[39] ギートとカビットはブラジ・バーシャーのクリシュナ詩人に好まれた韻律。ミーラー・バーイーがブラジ・バーシャーの詩人であったため、同じスタイルで詩を書き、返信したことを示している。

このような望みを命じられ、[上人は]出発した。[途中]美しい聖地の王の地（プラヤーグ）に滞在した。その時マカラ・サンクラーンティの沐浴の最高の刻がやってきた[40]。ヨーガ行者や苦行者、ジャイナ教苦行者や淑女、成人、凡人が集まっていた [D33]。

それから六日後、木の陰に二人の隠者がいることに気付いた。苦行を積んだ二人の顔は、その美しさで月も陰るほど、輝いていた。[上人は]遠くから五体投地をして、その場で手を合わせて立ち上がった。隠者は合図をして[上人を]呼んだ。自らのそばに立派な座を与えたが、それを遠慮し、[上人は]地面に座った。自ら名乗り、[隠者がヤージュニャヴァルキヤとバラドヴァージャであるという]面識を得た。そこでは師（＝ナルハリヤーナンド）がスーカラクシェートルで語ったラーマの講話が行われていた。驚いて秘密を尋ねた。ヤージュニャヴァルキヤ・ムニが語って聞かせた。「シヴァ神がその秘伝を作ってドゥルガー女神に授け、ブシュンディに教えた。私は行ってブシュンディからそれを教えてもらい、バラドヴァージャ・ムニのところに来て語っているのだ」

こうしてムニ[41]は満足し、御足に触れて恩義を受けた。そこで二人の最高の隠者の清らかな講話を聴いた [D34]。

その場所に翌日行くと、隠者のいない閑散とした場所を見た。木陰も庵もなかった。心の驚きが膨れ上がり、秘密が明らかになった。心に二人の隠者を思い抱き、慎み深い気持ちで立ち去った。

ハリに促されカーシーへ向かった。少し行って気がつくと、心の中でこれからどうしたものかと思った。過ぎたことは仕方がない、これからはこうしよう。シヴァ神を拝んでからアワドに行こう。

心を強く持ち、先へ向かった。進んでゆくとガンジスの岸に出た。その時岸から岸へと注意深く歩き、夕方になるとそこに泊まった。ディグプルとヴァーリプルの町の間にシーターマリーの地があった。そ

---

[40] 太陽がマカラ（山羊座）宮に入り、冬至にあたる。1 月 14 日ごろに祝われ、沐浴が行われる。

[41] このムニが指すのは、ヤージュニャヴァルキヤから知を授けてもらって満足したと解釈すればバラドヴァージャ・ムニになる。本テキストではムニという語が複数の人物に対して用いられており、トゥルシーダースにも使われるため、トゥルシーダースが二人の講話を聴いて満足したとも解釈できる。

こに座って瞑想した。腹は空かず、眠くならず不思議な状態だった。心に[ヴァールミーキとしての]前世のことが思い出された[42]。シーターマリーの木の根元で三日間過ごして、美しいカビット詩を著した[43]。

囚われていたビンディヤーチャルの王を解放し、カーシーに向かい到着した [D35]。最高の信者（＝トゥルシーダース）はガートでバラモンの家に滞在し、ラーマの清らかな名声を語り、心に喜びが生まれた [D36]。

日中いくら著しても、夜になると集めた詩は残らなかった。この消滅は毎日起こった。どうすればよいのか分からなかった。八日目にシヴァ神が夢枕に立った。「自分の言葉で自分の詩を著しなさい」眠りから覚めて起き上がって上人が座ると、胸の中で夢の言葉が響いた。神妃とともにシヴァ神が姿を現した。上人は八体倒置をした。シヴァ神は次のように語った。「人々の言葉で詩を作りなさい。神の言葉（サンスクリット）をまねるのではない。すべての者に利益となるようにしなさい。そして昔の方法を使わないように。お前はアワドの町に行って住みなさい。そこで自らの詩を著しなさい。私のめでたい恩義によって、[お前の]詩作はサーマヴェーダやヴェーダ讃歌と同等の成功を収めるだろう」

こう言って、シヴァ神と神妃はすぐさま姿を消した。自らの運命を理解した上人はアワドの町へと向かったのだった [S9]。

＜略号一覧＞

D: Dohā

S: Soraṭhā

S.V.: Vikrama Saṃvat

追記:本研究は JSPS 科研費 23520429 の助成を受けたものである。

---

[42] シーターマリーのこの木の場所にヴァールミーキの庵があり、ラーマに捨てられたシーターが身を寄せていたという。現在も伝承が語られている同名の地がある。

[43] 「美しいカビット詩を著した」とは、トゥルシーダースが『カヴィターワリー *Kavitāvalī*』を著したことを指している。